

ふじいでら 歴史紀行

230



土師の里の古墳群は、現在地上に姿を留めていませんが、元は菅田御廟山(応神天皇陵古墳の北東側、仲津山)仲姫命陵古墳の南側に、5世紀代に造られた15基の小さな古墳が分布していました。

その内、西清水古墳(土師の里5号墳)は、一辺30メートルの方墳です。5世紀後半の築造です。この古墳の発掘調査では、盾・蓋・家・人物といった形象埴輪が見つかっています。特に、隣接する穴から



▲西清水古墳 人物埴輪



▲西清水2号墳 甲冑形埴輪



見つかった人物埴輪は、頭部、腕などは欠損していますが、本来の形をうかがえる貴重なものです。また、西清水2号墳(土師の里12号墳)は5世紀中葉に造られた一辺10メートルの方墳ですが、ここからも家・蓋・盾・鞞・甲冑・馬といった、さまざまな種類の形象埴輪が見つかっています。特に、家形埴輪は少なくとも6個体分はあるようです。入母屋造りで復元すると高さ1メートルほどにもなる、大きなものもあります。

以上、2つの古墳を見てきましたが、さまざまな種類の形象埴輪が小さな古墳の墳丘に立て並べられたのには、どのような意味があったのでしょうか。それを解くヒントとして、大きな前方後円墳での事例を見てみましょう。形象埴輪は後円部や造出しなどに立てられ、後円部上の家形埴輪は、古墳に葬られた人物の死後の住居、被葬者の魂が宿る家をあらわしたものと考えられています。また、盾・鞞・甲冑・蓋といった埴輪が、家形埴輪を囲って守るように立て並べられています。

土師の里の古墳群の古墳は墳丘の大きさ8〜73メートル程度で、墳丘長二メートルを超える大きな前方後円墳と比べると、被葬者に身分的な差があったことは分かります。ですが、墳丘に立てられた形象埴輪に同じ種類があることから、家形埴輪に死者の魂が宿り、それを盾などの形象埴輪で守るという考え方が、被葬者の身分差に関わらず同じであったと言えるでしょう。小さな古墳でも、大きな前方後円墳の場合と同じ考えで死者へのまつりを行



▲西清水2号墳 家形埴輪

古市古墳群の小さな古墳たち ～その実像にせまる!～

土師の里の古墳群

つたのです。

さて、土師の里の古墳群の特徴の一つに、大きな円筒埴輪の形をした棺(円筒棺)を用いて被葬者を埋葬した土師の里8号墳の存在があげられます。この古墳は一辺12メートルの方墳で、5世紀中頃に造られました。土師の里の古墳群のある一帯は、古墳造りを担った土木技術者集団、土師氏の本拠地で、土師の里8号墳に葬られたのは、そのリーダー的な人物と考えられています。

(文化財保護課 新開 義夫)